

開催報告

家の光文化賞JA トップフォーラム2024

家の光文化賞農協懇話会と家の光協会は、8月1、2日の両日、「家の光文化賞JAトップフォーラム2024」を神奈川県内のホテルで開催。今回は「組合員との接点を強化する教育文化活動～今こそ、トップマネジメント力の発揮～」をテーマに、組合長・常勤役員などJAトップ層を中心に約300名が参加しました。先進JAの実践報告やパネルディスカッションなどの内容をダイジェストで紹介します。



組合員との接点を強化する教育文化活動 ～今こそ、トップマネジメント力の発揮～

摂南大学 教授
北川 太一 氏



■ J Aの組織力と総合力を発揮する 教育文化活動に

J Aのアイデンティティを確立するために重要な要素の1つ目は、J Aの理念、強みや有効性が明確で、関係者の間で共有されているか。2つ目はJ Aらしい事業と組合員を中心とした組織活動が実践されているか。3つ目はJ Aの理念と実践に対する組織内および社会的な認知がなされているかどうかです。

教育文化活動は組合員とのつながりを創る活動であり、個人・家族の暮らしをより良くする活動であり、人と人とのつながりを深め、地域社会をより良くする活動でもあります。また地域のいろいろな仲間とのつながりをつくるという側面もあり、未来のために、地域で豊かな食と農を育む活動にもつながっています。

教育文化活動を進める上では、ファンベースが鍵となります。ファンはJ Aが大切にしている価値を支持し、事業を利用し、活動に参加している人たちのこと。ファンとの接点を強化するために、①ファンを対象とした活動、②ファンとともに考える活動、③ファンとつながった人たちを対象にした活動を仕組んでいきます。これらを通じて、J Aの大切な理念・価値である「食と農を基軸として地域に根ざした協同組合」が実現するのだと思います。

教育文化活動をはじめ様々な事業や活動で、消費者の人たちが農業や食料の問題を考え、J Aの存在が重要だと思ってもらうことが必要です。そこまで念頭においた取組みが求められます。

J Aファンづくり検討委員会報告

10年後を見通した組織基盤強化を ～教育文化活動の推進でJ Aファンづくりを～

滋賀県立大学 名誉教授
増田 佳昭 氏



■ 実践するためにはトップ層の認識が重要

10年後のJ Aは、地域で経済活動を営み存続していくことが難しくなると想定されています。この状況を打開するためには、J Aファンづくりが必要です。

ファンづくりは組合員とJ Aとのつながりをつくり、そのつながりを強める活動です。そこで重要なのが、J Aが主体的に仕掛けること。組合員とJ Aとの隔たりを埋め、組合員と職員が一緒に組織的に取り組むこと。組合員の出番をつくり、自発性を引き出すこと。職員のやりがいにつながるJ Aファンづくりを実践することです。

実践する上では、まずJ Aファンづくりの対象者のセグメントを明確にします。できるだけ組合員や利用者に近い職員がファンづくりに関わることができるよう支店を重視し、全職員が関わる仕組みをつくること。L AやMA、T A C等の出向く職員を組合員との橋渡し役として位置づけます。

地域との関係を再点検し、地域の活動における連携も考えてもらいたいです。組合員や職員の成長を図る学びの場を設定し、J Aからの情報発信もしっかり行いましょう。

教育文化活動をJ A運営の基本に据え、本来業務として位置づけることが求められます。「教育文化活動基本方針」を策定し、教育文化活動やファンづくり運動指針を役職員で共有します。実践するためには、トップ層の認識が重要となります。とくにファンづくりに継続的に取り組むための仕組みづくりを期待しています。

これからのJA食農教育検討委員会報告

(一社)日本協同組合連携機構 基礎研究部 主席研究員
西井 賢悟 氏



■ 組織基盤と経営基盤強化策として 食農教育を実施

JA食農教育の取組みはアクティブ・メンバーシップの観点から、①「広報型」食農教育、②「体験型」食農教育、③「組合員主体型」食農教育の3つに類型化することができます。

「広報型」食農教育の特徴は、SNSやYouTubeなどの動画の活用、学校での食農教育に関する配布物が挙げられます。

「体験型」食農教育は、大学生向けの食農教育が増加したことで、インターンシップとしても機能している一面があります。多様な主体が連携することで学びの場がつけられる側面もあります。

「組合員主体型」食農教育は、青壮年部や女性部が教える側として参加していることが特徴です。食や農に関する優れた技術や知識を持つ人の派遣等が行われています。

全国のJAに共通して見られる課題としては、①JA事業の目標達成が最優先事項となり、食農教育等の地域活性化活動が後回しになる、②食農教育は当該部署だけでなくJA全体として取り組む必要があるというJA内部での理解不足が挙げられます。

そこで、①対話重視の広報で共感を高める、②学校教育の一環として実施する、③インターンシップとして実施する、の3つに気を配ってほしいと思います。そして全職員の基礎業務として食農教育を位置づけ、トップが食と農に対する熱い思いを語り行動で示し、司令塔として活躍していただきたいと思います。

J A筑紫における教育文化活動の取り組み ～食と農を次代につなぐために～

福岡県 J A 筑紫 代表理事組合長
白水 清博氏



■ トップの役割と支店等が主導した 運営による教育文化活動を

当 J A では J A ファンづくり活動として、くらしの活動と地域密着活動を総称する「ふれあい活動」(教育文化活動)を実施。これをメンバーシップ強化の手段として位置づけ、支店・事業所・直売所を拠点とした活動を展開してきました。

平成28年度に本店を含む26店舗に店舗運営委員会を設置、各組織の代表や准組合員などが参加し、ふれあい活動の内容等を協議するなど、組合員代表者と一緒に考え行動しています。

教育文化活動のうち、「教育・学習活動」では、組織リーダー研修会や全職員対象の人づくり研修会、女性組合員学習会などを実施。「情報・広報活動」では、支店だよりをはじめ組合員向け情報誌『ふぁみーゆ』、地域住民向け情報誌『ふぁみーゆプラス』、母親世代向けの『c o m u』を発行しています。「生活文化活動」では、小学校での食農授業、収穫体験、子ども料理教室などに力を入れています。「組合員組織の育成活動」では、女性部が主体となって子ども食堂「ちゃぐりん食堂」を実施し、小学校や地域住民、地域コミュニティを巻き込む支店を中心とした地域密着の活動を行っています。

組合員が安心して利用できる J A であるためには、総合事業を活かしたサービス展開が J A トップの役割となります。准組合員も含めて組合員数の増加を図り、つながりを大事にし、身近な地域の J A、金融機関として職員と気軽に顔を合わせられるよう、支店統合をあえて行わず支店機能を維持強化していきます。

これまでの教育文化活動の歩みと これからの夢ある未来へ

神奈川県JAあつぎ 代表理事組合長
大貫 盛雄 氏



■ 教育文化活動で組合員とともに考える 職員の育成を

平成5年度をピークに事業総利益は下降の一途をたどっていましたが、組合員とのつながりを再構築し地域におけるJAの必要性を訴求するための活動を模索し、平成22年を「教育文化活動元年」として取組みが始まりました。当初は役員・本所主導の活動を展開しましたが、平成24年の「家の光文化賞」受賞を契機に、支所店を中心とした教育文化活動を再始動しました。

「教育・学習活動」では、小学生の親子を対象とした通年型食農教育事業「夢未Kidsスクール」の開催や、地場産農畜産物使用の料理講習会などを行う「DaidoCoひなた」を開設。「情報・広報活動」では、組合員向け情報誌『グリーンアートあつぎ』、准組合員向け広報紙『Green Page』の定期発行のほか、地域住民向けコミュニティ誌、小学校を通じての子ども向け広報紙『こどもグリーンだより』の配布も行っています。WebやSNS等による情報発信、組合長によるトップ広報も行っています。

「組合員組織の育成」では、常勤役員との意見交換・対話運動や、組合員組織改革のための組織戦略プロジェクトの活動に取り組むとともに、生産組織との関係強化に取り組んでいます。准組合員は「農とくらしをともに支えるパートナー」と位置付け、「1支所店1准組合員活動」を実践。本所では、准組合員向けの野菜栽培講習会や相続・資産形成セミナーなどを実施しています。「生活文化活動」では、各地区での特色を活かした女性部活動を展開し、次世代層が加入しやすい体制へと次世代部「Neoフレミズ」も発足しています。

教育文化活動で職員の意識は確実に変化しました。JAの事業が組合員の思いとつながっていることを理解し協同活動に意欲的に取組み、組合員にもJAは自分たちの組織であるという理解が高まり始めています。組合員とともに考えることのできる職員を一人でも多くつくるのが、私の大きな役割だと認識しています。

教育文化活動促進のための 家の光事業の展開

家の光協会 代表理事専務
木下 春雄



■ 組合員・役職員が一体となった 教育文化活動を

組織基盤強化（J A仲間づくり）戦略では、組合員との関係を強化し、J Aくらしの活動、教育文化活動や地域貢献活動等の協同活動への参加促進を図ります。組合員の学びの場づくりやリーダー育成においては、組合員学習に関する先進事例の掘り起こし・事例紹介、組合員大学普及等に取り組めます。

経営基盤強化戦略では、働きやすい、働きたいと感じる職場づくりに取り組み、J A経営・協同組合運動を支える人材の育成を行います。

くらし・地域活性化戦略では、協同活動と総合事業を通じ地域社会の持続的発展に寄与します。すべてのJ Aで、くらしの活動や教育文化活動の協同活動の取組計画を策定し、J Aの役職員と組合員が一体となって実践していただきたいです。

広報戦略では、組織内広報（インナー広報）による役職員・組合員の理解促進として、『家の光』等のJ Aグループの機関紙誌等の活用により、農業や協同組合等に関する情報収集や学習活動を進め、J Aグループ内の情報共有を迅速に進めていきます。

教育文化活動の促進のため、①教育文化活動基本方針、組織基盤強化基本方針の策定、②J A事業計画への教育文化活動・家の光事業の位置づけ、③家の光文化賞・家の光文化賞促進賞への挑戦、④J A役職員から「家活」を実施することの4つを各J Aに提案します。

組合員との接点を強化する教育文化活動

～今こそ、トップマネジメント力の発揮～

● コーディネーター

摂南大学 教授 **北川 太一** 氏

● パネリスト

J A 筑紫 代表理事組合長 **白水 清博** 氏

J A あつぎ 代表理事組合長 **大貫 盛雄** 氏

滋賀県立大学 名誉教授 **増田 佳昭** 氏

家の光協会 代表理事専務 **木下 春雄**



北川：会場の参加 J A からそれぞれの教育文化活動の取組みを発表いただき、パネリストからコメントをいただきたいと思います。

J A 新みやぎ・佐藤由一代表理事専務：役職員を対象に教育文化活動セミナーを開催しています。『家の光』等の推進等について各支店のふれあい担当やくらしの担当者への研修会を実施しました。女性組織を対象とした活性化検討委員会も設置し、フレミズやエルダー層の女性組織を設立しました。

J A みえなか・岡田勇樹専務理事：組合員・地域の方・J A の三位一体で行う「ふれあい活動」を実施し、支店の取組み、支店だよりや支店新聞等に表彰制度を設定しました。広報委員会の設置や農産物 P R 隊「みえなかあぐり隊」による動画配信等の広報活動も実施しています。また女性職員に女性組織活動に参加してもらうよう呼びかけています。

J A ぎふ・岩佐哲司代表理事組合長：J A ぎふにおける個人業績評価では、組合員からの相談や意見等を書き込む「暮らしの相談受付簿」の提出枚数をはじめとした取組む姿勢や、組合員・利用者の「声」に寄り添った活動が顕著な者を評価しています。

白水：組合員だけではなく、地域の皆さんにも認知し応援していただくことが大事です。一方、職員自身が体験し教育文化活動の大切さを理解することも必要になります。トップが役職員を支え、実践の場をつくってもらいたいです。

大貫：組合員が主体となり、職員はサポートをするという考え方が大切です。特に職員においては、教育文化活動は職員一人一人に共通する活動であるという認識を持ってほしいと思います。職員と組合員、職員同士のコミュニケーションを活発に行うことが基礎になると感じます。

増田：支店表彰等をはじめとした評価制度は良い活動や取り組みを実施した支店や個人を評価する仕組みです。『家の光』を読んで活用する仕組みもつくることで、読む意欲が湧くのではないのでしょうか。仕組みに落とし込む取り組みを考えてほしいと思います。

木下：ファンづくりに資する家の光事業として、①ファンづくりの促進に役立つ研修や学習の場の提供、②ファンづくりの実践に役立つコンテンツの提供と媒体の発行、③教育文化・家の光プランナーの登録と活動支援、④講師のあっせん、⑤優良事例の情報提供が挙げられます。ぜひ本フォーラムからヒントをもらっていただきたいと思います。

まとめ講演

摂南大学 教授
北川 太一 氏



■ 自らのJAに即した取組みを継続する

教育文化活動では、まず役職員の理解醸成に取り組むことが重要です。JA職員の本来業務はつながりづくりであることを念頭に置いていただきたいと思います。また各種のセミナーに積極的に参加し、学んだことを自らのJAや職場に持ち帰ること、組合員との対話をしっかり実践するようJAが促すことも重要です。教育文化活動と事業を結びつけるために、事業の推進上の課題を把握し、課題解決につながる教育文化活動やくらしの活動を考えてほしいと思います。

各JAで徹底的に議論を行い、ファンづくりや教育文化活動の促進に関する基本方針や実行計画を策定していただきたいです。

トップの役割は、トップダウンとボトムアップを両方踏まえ、保証すること。JAの本質や原点を見つめ直し、自らの言葉で協同組合やJAの本来のアイデンティティを組織内外に発信することがトップに求められていると思います。

教育文化活動やJAファンづくりは息の長い取組みです。事例を聞いてそのまま当てはめるのではなく、自らのJAに合うよう改良し実行に移して取組んでください。

健康づくりからはじめる 仲間づくりと地域づくり

医師・作家
鎌田 實 氏



■ 市民への行動変容を促し健康を目指す

健康づくりを進め元気であることが、日本の農村地帯を活性化していくうえで大事だと認識しています。その健康法として、`腸活、と`筋活、があります。

腸活では、「朝は来た、賑やかだ」(油、魚、発酵食品、きのこ、卵、肉、牛乳、野菜、海藻、大豆食品)を意識した食品を食べ、野菜の摂取量は1日あたり350gを目指していただきたいです。脳卒中を予防し、細胞のがん化を弱めることができます。併せて、減塩も実践することで、血管の老化を防ぎ、動脈硬化や心筋梗塞の予防にもなります。JAのトップ層が健康づくりに対し音頭を取って発想を転換し、地域の皆さんの行動変容を促進していただきたいです。

筋活は、運動し筋力をつけること。筋肉に刺激を与えることで、血圧や血糖値を下げ、認知症予防にもつながります。身体的フレイルの予防にもなります。運動はウォーキングやスクワットがおすすめです。ウォーキングは幅広く歩くことを意識し、時間は短くインターバルをとって行っても良いです。スクワットは筋肉を伸ばすことに意識を向けると、より効果が高まります。JAにもこのような取り組みを実践してもらおうと良いと思います。

フレイルには身体的フレイル、精神的フレイル、社会的フレイルがあります。特に社会的フレイルは、社会参加が少なくなることでアミロイドβが放出され、認知機能の低下の要因の1つにもなります。農村地帯の高齢者を対象としたおもしろいイベント等で社会へ引き出す機会をつくり、地域のつながりもつくっていく。JAにはこのような役割も求められていると感じます。